

台湾の老指導者の懸念

つい先だつてのことだが、台湾の北東亜学会のシンポジウム『日本の総選挙後のアジア情勢』の基調講演者として招かれ、「鳩山政権の外交課題」について話をしてくれた。沖繩米軍基地に関する日本の新政権の迷走ぶりは台湾でもつとに知られており、日米同盟が廃棄に追い込まれるようなことになれば台湾はどうなるのかという強い危機感が会場を漂っていた。

暗澹たるものだといひ、氏は私の講演にコメントを残して、統一地方選の仕事のためにあわただしく会場を去っていった。その後ろ姿に私は熱いものを感じていた。

ルース大使の怒りを理解

帰国して12月15日付の『普天間移設先振り出し』を首相が決意したという新聞報道に接し、虚ろな感覚を味わわされている。本欄(11月18日付)で私は、2006年5月の日米両国政府合意の早期決着のために設置される日米外務・防衛当局閣僚級作業部会など決着先送りのための「擬装」にちがいないと書いたが、はたせるかなそうであった。

同コラムで私はこうも書いた。政党であるからには「主義」をもち、この主義を政策化するものは民主主義社会にあっては当然のことだ。しかし安全保障にだけは「主義」をもちこんではならない。み

「離米・親中」に舵取りしている

正論



拓殖大学学長  
渡辺 利夫

ずからを取り巻く国際政治環境を恰利に見据え、いかにすれば国益が守られるか、その一点のみに思いを定め、その思いを徹底させよと主張した。

「子ども手当」「高校授業料無料化」「ガソリン税無税化」「高速料金無料化」など、所詮は国内の所得移転の問題である。前者は、子供・高校生をもたない人からもつ人への、後者は、自動車保有しない人から保有する人への所得移転である。マクロ的にいへば「一得一失」である。帳尻は

まあ大体がゼロである。私は賛成もしないかわりに反対もしない。社会主義者まで包摂する民主党政権なのだから、強者を締め弱者にやさしい政策であっておかしくはない。しかし外交と安全保障だけは「一得一失」ではない。まかりまちがえば国民の生命と財産を無にしてしまう「オール・オア・ナッシング」の大事なのである。

先月13日夕刻の日米首脳会談で普天間問題の早期決着を迫るオバマ大統領に鳩山首相は、私を信じてほしい」と述べて年内決着の印を押しつけた。だが、

象をはっきりと伝えたのだが、どうやらこれも「擬装」だったようだ。擬装が剥がれて真実が明らかとなり、ルース駐日米大使は、3人だけで話したい」といひ岡田外相と北沢防衛相を前に大声で鳩山政権の不誠実をなじったという。オバマ氏を支える中心的人物の一人ルース氏が激怒した気持ちは私にもわかる。作業部会で岡田外相は、社民党という連立与党がキヤンプ・シユワフ沿岸部への移設に反対しているので年内合意は難しい」といひ、北沢防衛相は来年度予算で移設関連経費を計上するから作業部会での検討作業をつづけよう米側も協力してほしいと発言した、このことである。真実であれば、これに怒りを露わにしない外交官がいようか。

中」の方向に日本外交の舵を取ろうとしているのであろう。連立与党との関係で厳しい立場にある」といひのまたの言い訳に過ぎまい。名護市と沖繩県知事が日米合意に同意しているのに、県外・国外移転を相導して沖繩県民の複雑な心理を弄んでいるのが日本の新政権である。

現実を直視せず、実現できそうにない高い理想を掲げてこれを追求することを私は「理想主義」とは呼ばない。容易に変えることのできない現実と格闘し、理想に向けて小さなブロックを一つ一つ積み上げていく忍耐強い人間の営為が本当の「理想主義」なのではないか。(わたなべ、としお)